

「記憶」とプロパガンダ —第二次世界大戦時における英国の対独プロパガンダ— ‘Memory’ and Propaganda British Propaganda to Germany in the World War II

津田正太郎
Shotaro TSUDA

法政大学社会学部 Hosei University, Faculty of Social Sciences

要旨 第二次世界大戦における英国の対独プロパガンダ方針は、英国人が有する第一次世界大戦の記憶から強い影響を受けていた。他方で、ドイツ人の「記憶」のあり方が問題視され、そのことも対独プロパガンダに影響を与えた。以上を踏まえ、プロパガンダ研究では記憶および「記憶」が重要な要素になりうることを示す。

キーワード プロパガンダ、記憶、BBC

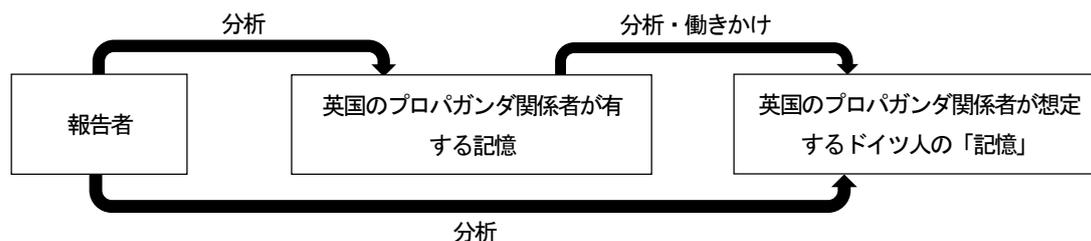
1 問題の所在

本報告の目的は、第二次世界大戦時の英国による対独プロパガンダを記憶という観点から分析することにある。戦争時のプロパガンダに関しては、心理操作の技法やメディアの統制方法、あるいは憎悪を喚起するための敵の表象といった観点から論じられることが多い。しかし、実際のプロパガンダはそれを取り巻く様々な要因から影響を受けるのであり、ある文脈では有効とされる手法が、別の文脈では無効であるばかりか、むしろ軍事的、外交的な観点からはマイナスに作用する可能性もあるとされる。加えて、政治家や軍人を含むプロパガンダ政策に関係する人びとが一枚岩であるとは限らず、その方針をめぐって深刻な対立が生じることもある。したがって、プロパガンダのあり方をより深く理解するためには、それがいかなる文脈のなかに置かれていたのかを検討する必要がある。

そうした文脈のなかで、本報告において特に注目したいのが記憶という文脈である。プロパガンダ政策に影響を与える要因としては、外交／軍事方針、戦局に対する認識、敵側によるプロパガンダ、ターゲットが置かれた状況に関する認識など、さまざまなものが挙げられる。しかし、とりわけ第一次世界大戦が終結してからわずか21年後に勃発した欧州での大戦におけるプロパガンダについては、先の大戦の記憶を抜きにして語ることはできない。それが戦争初期の英国の対独プロパガンダに大きな影響を与えたのみならず、戦争末期においては重い足かせとなったからである。

ここで注意する必要があるのは、プロパガンダに関係する人びとが有する記憶のみならず、そのターゲットが有していると彼らが想定するところの「記憶」もまた重要な要因になるということである。後述するように、英国のプロパガンダ関係者にとって「ドイツ人が第一次世界大戦をどのように記憶したのか」という歴史認識にかんする問題は、重要な検討課題だったのである。本報告では、英国のプロパガンダ関係者が有していた記憶と区別するために、彼らが想定し、働きかけようとしていたドイツ人の記憶を「記憶」として表記することにしたい。この関係を図で示すと次のようになる（図1）。

図1 本報告における分析対象



本報告では、以上の問題意識に従い、まずは第一次世界大戦の記憶および「記憶」の問題について論じる。ここでの主題となるのは「第一次世界大戦においてドイツは英国のプロパガンダによって敗れた」という記憶および「記憶」である。英国側のこうした記憶が、第二次世界大戦においてもドイツにはプロパガンダによって勝利できるという願望を補強したと考えられるからである。しかし、1940年5月以降の戦局の急速な悪化に伴い、そうした願望は潰える。そこで浮上してくるのが「ヴァンシタート主義」である。一般のドイツ国民とナチスとを区別せず、両者を一体のもののみならずこうした発想は、対独プロパガンダのみならず、無条件降伏要求という連合国の方針にも影響を及ぼすことになった。ここからは、ドイツ人がもつ「記憶」を含め、彼らの思想を根底から作り変えねばならないという主張が導き出されることになるのである。だが、戦争が終結へと向かうなかで、ヴァンシタート主義とそれに連なる無条件降伏要求は、連合国のプロパガンダ担当者を深く悩ませることになる。このように、記憶および「記憶」はプロパガンダに様々な形で影響を及ぼすのであり、それを踏まえて研究を進めることで、より広い政治的、社会的文脈のなかにプロパガンダを位置づけることが可能になると考えられる。

2 本研究の位置づけと方法

第二次世界大戦時における英国のプロパガンダに関しては数多くの研究が行われているが、対独プロパガンダについては、Fraser (1957)、Briggs (1970)、Balfour (1979/2011)、Taylor (1999)、Seal (2015)などを先行研究として挙げる事ができる。また、ヴァンシタート主義に関しては、Goldman (1979)、Ramsden (2007)などの研究がある。

また、英国のプロパガンダに関しては関係者の手記も数多く出版されており、代表的なものとしては、Crossman (1949/1952)、Lockhart (1947/1950)、Kirkpatrick (1959)、Gisewood (1968)などがある。また、本報告では大きく取り扱わないが、発信元を偽って情報の流布を行う「ブラック・プロパガンダ」に関わった人物の手記として Delmer (1962)も挙げられよう。

これらに加えて、重要な記録として位置づけられようのが、Garrett (2002)である。これは1941年に設立され、英国の対外プロパガンダにおいて大きな役割を果たした政治戦争執行部 (Political Warfare Executive : PWE) の設立から運営、諸問題について、そのメンバーが1945年から46年にかけて執筆した報告書が2002年に出版されたものである。

本報告では、以上の先行研究や手記、報告書を参照しながら、記憶および「記憶」という観点から英国の対独プロパガンダについて再検討を行う。先行研究においてはヴァンシタート主義や無条件降伏要求がプロパガンダ政策に与えた影響についてはすでに論じられているが、管見の限り、記憶ならびに「記憶」を主題とした研究は見当たらない。また、ヴァンシタート主義が「プロパガンダは人びとの思考や行動を簡単に操作できる」というプロパガンダ神話の解体と結びついていた点を指摘することを本研究の学術的貢献と考えたい。

3 第一次世界大戦の記憶

第一次世界大戦でドイツはどのようにして破れたのか。標準的な記述を参照すると、その理由は以下ようになる(木村2014)。1918年3月にドイツ軍は大攻勢を仕掛けたが、7月中旬には連合軍の反撃が始まり、後退を重ねていく。ドイツの同盟国は次々と戦争から脱落し、9月にはドイツの軍事指導者であったヒンデンブルクとルーデンドルフが皇帝に対して連合軍との即時休戦を求める。ドイツでは新たに発足した政権が休戦交渉を開始したが、ドイツ海軍は英国海軍との決戦を企図し、全艦隊をキール沖に終結させた。その自殺的な作戦に対して水兵たちは命令に服従せず、「キール軍港の水兵反乱」が発生する。この動きを陸軍兵士、社会主義政党、一般国民が支持した結果、ドイツ革命が勃発し、帝政は崩壊した、という流れである。

ここで注目されるのは、ドイツ軍が決定的には崩壊しなかったという事実と、即時休戦を求めた後のルーデンドルフの動向である。物資の面で連合軍には遠く及ばず、軍事的にはほぼ絶望的な状況にあったものの、軍隊組織はなお温存されていた。9月に即時休戦を求めたルーデンドルフは、10月中旬にはドイツ軍はまだ戦えると訴えるようになり、それが容れられなかったことで軍を去る。そして、戦後になると彼は「ドイツは戦場では破れなかったが、背後から刺されたことで破れた」との主張を展開するようになる。これが「背後からの刺殺神話」の始まりであり、敗戦直後からドイツでは急激な広がりを見せた。

それでは、神話において「背後からの刺殺」は何によって生じたとされたのか。その黒幕としてユダヤ人や共産主義者の存在が挙げられる一方、重要な要素とみなされたのが英国によるプロパガンダである。たとえば、ヒトラーの『わが闘争』にも、「1915年とともに敵の宣伝がわれわれに対してはじまり、1916年以降それはますます集中化し、ついには1918年のはじめにまさしく洪水のようにふくれあがった。だから早くも一步一步この心をとらえる効果が認められてきた。軍隊は次第に、敵の思うつぼ通りの考え方をするようになった」との記述がみられる(ヒトラー1973:245)。すなわち、「背後からの刺殺神話」は、戦闘によってではなくプロパガンダによって敵を崩壊させられるという「プロパガンダ神話」でもあったのである。

こうしたプロパガンダ神話は、英国でも共有されるようになる（Kirkpatrick 1959: 147）。それをうかがえるのが、キャンベル・スチュアートの著作『クルーハウスの秘密』（1920年）である。この著作は、第一次世界大戦末期に英国政府が設立した敵国プロパガンダ部（Department of Propaganda in Enemy Countries／通称クルーハウス）に所属したスチュアートの体験をもとに執筆されている。スチュアートはこの著作で、ルーデンドルフの証言を紹介し、英国のプロパガンダの効果を論じている（Stuart 1920: 129-131）。いわば、英国のプロパガンダの効果を強調することで責任を回避したいルーデンドルフと、それによって自らの手腕を誇示したいスチュアートとの共犯関係のもと、プロパガンダ神話がドイツと英国の両国で広がっていったと考えられる。

1930年代半ばには、英国では第一次世界大戦終結後に廃止されたプロパガンダ機関を再建するための準備が始められることになる。1935年には主として英国国内や中立国に対するプロパガンダを担当することになる情報省の設立準備が始まり、1938年9月には敵国プロパガンダ部の再建も開始される。後者の責任者として招集されたのがスチュアートであった。加えて、第一次世界大戦終結後にプロパガンダ機関にかんする書類は廃棄、紛失していたため、それら再建にあたって利用されたのがまさに『クルーハウスの秘密』のような回顧録の類だったのである（Taylor 1999: 118）。こうした理由により、第二次世界大戦が勃発した当初、英国のプロパガンダ機関は、プロパガンダの効力を過大に評価する傾向にあった。それに拍車をかけることになったのが、チェンバレン政権の戦争遂行方針であった。次に、この点について見ていくことにしよう。

4 「プロパガンダによる勝利」

1939年9月に英仏がドイツに宣戦を布告したとき、英国では即座にドイツ空軍による英国への空爆が始まると予想されていた。だが、英仏とドイツとの交戦が本格的に始まるのは翌年の5月からであり、それまでの期間は「まやかし戦争（phony war）」と呼ばれる。とはいえ、まやかし戦争のあいだ、英国がドイツに対して何も仕掛けなかったというわけではない。ドイツによる爆撃機での報復を避けつつ、ナチス政権を転覆させようの手段として、プロパガンダによる攻撃が試みられたのである。

BBCのドイツ語放送は、ミュンヘン危機のさなかに既に開始されており、英国の平和的意図やその政治的／経済的制度的優越性をドイツの一般市民に伝えるべく放送を行っていた（Seul 2015: 381）。同局の外国語放送は外務省の厳格な統制下にあったものの、BBCの信頼性を維持するため、その事実はドイツ人の聴取者には伝えられなかった。ドイツの全体主義に対して英国の民主主義の優越性を説くことがドイツ語放送の使命であり、そこでは英国における「言論の自由」がさかんに喧伝されていた以上、放送が国家の統制下にあるという事実は隠蔽されねばならなかったのである。

そうしたプロパガンダ攻撃の前提となっていたのは、「良きドイツ人」と「悪しきドイツ人」という区別であった。英国が戦っているのは、あくまで「悪しきドイツ人」たるナチスだけだということである。たとえば、戦争勃発当初、チェンバレン首相がBBCを通じてドイツ人に送ったメッセージは「この戦争において、われわれはあなたがたと戦うではありません。自身の国民共同体だけではなく、西洋文明全体、そしてあなたがたとわれわれとが大切にしているもの全てを裏切ってきた暴虐で虚偽的な体制とわれわれは戦うのです」というものであった（Nicholas 1996: 150）。戦争勃発前から多くのドイツ人が英国に亡命してきていたが、彼らに代表される「良きドイツ人」がドイツ国内にはまだ数多く存在し、そうした人びとを扇動することでナチス政権を転覆できるという発想をここにみることができる。そうした発想を支えていたのが、ドイツの経済的、政治的の脆弱性に関する思い込みであった（Todman 2017: 202）。すなわち、ドイツ経済は脆弱な基礎の上に成り立っていることに加え、英仏との開戦によって政治的不安が高まっていることから、経済封鎖によって国内を不安定化させれば、ナチス政権への不満が顕在化し、体制転換へとつなげることが可能だと想定されていたのである。

ただし、スチュアートの指揮のもとで展開された「良きドイツ人」へのプロパガンダで重視されたのは、ラジオではなくピラであった。ここにも第一次世界大戦の記憶の影響をみることができる。すなわち、先の大戦においてピラによるプロパガンダ攻勢がドイツの転覆に成功したという記憶が、「良きドイツ人」の理性に訴えかけることができると考えられたピラを主要なプロパガンダ手段として選択させたのである（Gamet 2002: 3）。戦争開始当初、爆撃機から大量のピラを散布するという方法は、ドイツを爆撃することで反撃不能の報復を生じさせることを恐れていた英国空軍からも歓迎された。空軍側には、プロパガンダによるナチス転覆に対する期待ではなく、ドイツ上空への夜間飛行の訓練になりうるという期待があったとも指摘される（Newcourt-Nowodworski 2005: 56-57）。

だが、プロパガンダによる勝利を目指したチェンバレン政権は、1940年4月に始まったノルウェー作戦の失敗によって崩壊する。さらに、5月以降のドイツの攻勢とフランスの休戦は、プロパガンダ神話の解体に大きく寄与したと言ってよい。チェンバレンの後を引き継いだチャーチルは「プロパガンダでは戦争に勝てない」との認識のもと、あくまで軍事力による勝利こそが必須だと考えていたからである（Briggs 1970: 3; Balfour 1979/2011: 65）。プロパガンダ神話の唱道者であったスチュアートも、組織

再編に伴って1940年8月には辞任している。こうしたなかで浮上してくるのが、「良きドイツ人」と「悪しきドイツ人」との区別を否定した「ヴァンシタート主義」なのである。

5 ヴァンシタート主義とプロパガンダ神話の解体

プロパガンダ研究では、敵対する国民全体を悪魔的に表象するプロパガンダとの対比において、敵の指導者層こそが攻撃対象であり、むしろ彼らから一般国民を救済することこそが戦争の目的だと訴えるのがより洗練されたプロパガンダだと指摘されることがある（モレリ 2002）。しかし、これまで見てきたように、第二次世界大戦時の英国のプロパガンダには、それとは逆の流れをみることができる。すなわち、ナチスだけではなく、ドイツ国民そのものに戦争の原因があるという発想がプロパガンダ政策にも流れ込んできたのである。

そうした流れが生じるにあって大きな役割を果たしたのがフランスからの圧力であった（Biggs 1970: 171）。だが、より重要だったのは、元外交官であり、戦争勃発時には政府の外交アドバイザーとなっていたロバート・ヴァンシタートであった。ヴァンシタートは、ドイツという国家、国民全体への嫌悪を隠さない人物であり、ナチスとは突然変異的に現れた存在ではなく、むしろ同国の軍国主義的な文化の延長線上に位置づけられる存在だと論じていた。ヴァンシタートは1940年7月に発足した、枢軸国へのプロパガンダを含む謀略工作を担当した特殊作戦執行部（Special Operations Executive: SOE）の主要なアドバイザーに就任している（Gamett 2002: 36）。さらに、1940年11月から12月にかけてヴァンシタートは上記の認識に基づく講話をBBCで行い、その抜粋が『サンデー・タイムズ』に掲載された。それをまとめたのが1941年に出版された『ブラック・レコード』であり、同書の発行部数は50万部に達したという。以下では、『ブラック・レコード』と、ヴァンシタートが1943年に出版した『私の人生の教訓』をもとに、彼の主張のポイントを抽出しておこう。

これら二冊の著作に通底しているのは「ドイツ人は強烈な被害者意識のもと、他国を征服、服従させることを行動原理とし、嘘をつくことに何らのためらいも覚えない国民である」という認識である。こうしたドイツ人に関する主張に対しては、当然、ナチスの人種理論との共通性を指摘する声が上がります。それに対し、ヴァンシタートは次のように反論する。まず、彼は個人の次元では「良きドイツ人」が存在することを否定しない。だが、「良きドイツ人」はつねに少数派であって、集団としてのドイツ人こそが問題なのだと主張する（Vansittart 1941: 18）。次に、彼はドイツ人に変化が生じる可能性を否定しない。ドイツ人の「再教育」こそが必要なのであり、軍国主義的な歴史教育や文化、制度や組織を徹底的に破壊することで、ドイツの平和的繁栄は可能になるというのである（前掲書: 54）。

こうしたヴァンシタートの主張は、英国内において大きな論争を巻き起し、とりわけ左派からの強い批判を招いた。その論点の一つは、ドイツ人全体を悪とみなすヴァンシタートの論法によって「良きドイツ人」がドイツ国内で蜂起する機会を損なっているというものであった（Ransden 2007: 198）。事実、ゲッベルスは『ブラック・レコード』の抜粋をドイツの諸都市の壁に貼り付けることで、英国に対する敵意を高揚させようと試みたとされ、そうした批判の根拠は皆無ではなかった。しかし、チャーチルをはじめとする英国内の保守派はヴァンシタートの見解を支持し、「ヴァンシタート主義」は英国の外交やプロパガンダ方針を規定していくことになったのである。

ヴァンシタート主義はまた、プロパガンダ神話の解体にとっても重要な意味を有していた。この点を検討するうえで有用なのが、戦前にはアバディーン大学で経済学を教え、戦時中にはBBCドイツ語サービスに勤務していたリンドリー・フレイザーの著作『戦間期におけるドイツ』（1944年）である。ナチスのプロパガンダの「虚偽性」を暴露することを目的としたこの著作は、先に述べた「背後からの刺殺神話」の検討から始まる。フレイザーは「英国はプロパガンダによってドイツに勝利した」という主張が誤りであることを示すとともに、プロパガンダの効力には明確な限界があると論じる。すなわち、プロパガンダが効力を発揮するのはターゲットがそれを「信じたい」場合に限られ、プロパガンダそのものに人びとの思想を変化させる力はほとんどないというのである（Fraser 1944: 172）。したがって、ナチスがドイツ国内で展開したプロパガンダについても、ドイツ国民はそれに騙されたのだという論理をフレイザーは採用しない。この点について彼自身の著作から引用しておこう。

自らの歴史の歪曲物に対する熱狂的かつ狂信的な信念を刺激されることをドイツ人民は許してきた。語りかける相手が喜んで被害者になるようなことがなければ、つまり納得させられることを欲しなければ、プロパガンディストたちは決してそのような勝利を得ることはできなかっただろう。「この意味において」ドイツ人の大多数は自身が国民社会主義者だったのである。（前掲書: 172、強調は引用者）

このように「一般のドイツ国民とナチスとは一体である」というヴァンシタート主義と、「ドイツ人はプロパガンダに騙されたわけではない」というプロパガンダ神話の否定とは明確に結びついていた。こうして戦争勃発直後とは異なり、戦争後半になるとプロパガンダとはあくまで補助的手段であり、それ自体で戦局を変える力はないという認識がプロパガンダ担当者のあいだでも共有されるようになったのである (Lockhart 1947: 155)

以上の認識の変化にやや先行しながら BBC ドイツ語サービスも、「良きドイツ人」に蜂起を促すのではなく、ニュースや娯楽の提供、ドイツ人捕虜に関する情報発信を重視するものへと変化する (Briggs 1970: 427-433)。「まやかし戦争」の時期に対独プロパガンダで展開された英仏の強力さの誇示がかえって信頼性を損なったという反省のもと、連合軍の敗退も含め、より事実には忠実な情報の伝達が行われるようになった。無論、それは完全に中立的な報道だったわけではなく、BBCの「客観性」に対する信頼を涵養しながらも、情報の解釈や取舍選択を通じて聴取者をひそかに説得しようと試みるものであった (Crossman 1949: 342-345)。しかし、ヴァンシタート主義ときわめて親和的な、枢軸国に対する連合国の無条件降伏要求は、戦争終結が近づくにつれてプロパガンダ担当者に難問をもたらすことになった。次に、この点について検討していくことにしよう。

6 無条件降伏要求という制約

1943年1月にローズベルトとチャーチルとが行ったカサブランカ会談における共同記者会見で表明された、枢軸国に無条件降伏を要求する方針には賛否があったことはよく知られている。たとえば、1944年11月まで米国国務長官を務めたハルは、自らの回顧録で無条件降伏要求には米国政府内でも自身を含めて反対が多かったことを述べたうえで、その理由として、①枢軸国側の徹底抗戦をもたらす、戦争がより長期化する可能性があること、②戦後においては連合国が枢軸国の統治を引き受けることになり、その負担が増すことを挙げている (ハル 2001: 324-325)。さらに、無条件降伏要求がナチスによる戦意高揚のためのプロパガンダの材料に使われてしまったことも指摘している。

それでは、なぜ無条件降伏要求という方針が提起されたのだろうか。一つの理由としては、米英が最後まで戦争を戦い抜くという意思をソ連に示し、後者とドイツとの単独講和を回避しようとする意図があったとされる (Lockhart 1947: 229)。だが、より重要な理由は、まさにカサブランカ会議でのローズベルトによる「(無条件降伏とは：引用者)ドイツ、イタリア、日本の国民の絶滅を意味するのではなく、他国民の征服と隷属に基礎をおくこれら諸国の哲学の破壊を意味する」という発言に示されているといつてよい (藤田 2007: 5)。第一次世界大戦の戦後処理では、ヴァイマル共和国というひ弱な民主主義体制をそのままドイツ人に委ねた結果、ナチスの台頭をもたらしてしまった。第二次世界大戦の戦後処理も単なる政権交代で済ませてしまえば、遠からず第三次世界大戦を招くであろうという危機感が存在したのである (Balfour 1979/2011: 366)。

そして、無条件降伏要求の理由としてもう一つ挙げられるのが、先に挙げた「背後からの刺殺神話」である。つまり、今回はドイツの軍事力を徹底的に破壊することで、そうした神話が発生する余地をなくするという発想があったとされる (藤田 2007: 7)。以上のように、無条件降伏要求の方針の背後には、第一次世界大戦とその戦後処理にかんする「記憶」への配慮が強く作用していたとすることができる。

こうした無条件降伏要求は、連合国側のプロパガンダに大きな制約を課すことになった。無条件降伏には複数の解釈が存在したが「何らの条件もつけることなく降伏し、その後は勝者の要求を何であれ受け入れる」という解釈に従うなら、戦争が終結するまでプロパガンダ担当者はドイツ側に対して何らの約束もできないことになる。第一次世界大戦時に米国のウィルソン大統領が発表した「14か条の平和原則」がドイツには適用されない空約束であったということをナチスは繰り返し喧伝しており (Crossman 1949: 331)、戦前の約束が政策変更によって戦後に実施できなくなった場合、ドイツ人に「プロパガンダに騙されて敗れた」という「記憶」をまたしても与えてしまうことになりかねないからである。

一例を挙げるなら、1944年10月、ドイツのザール地方への侵攻を計画していた連合国遠征軍最高司令部 (Supreme Headquarters Allied Expeditionary Force: SHAEF) は、占領後の資源確保の観点から、ドイツ軍の撤退後にも炭鉱に留まるようドイツ人炭鉱夫に呼びかけようと考えた (Crossman 1949: 331)。そのため、英国のPWEからSHAEFの心理戦争部 (Psychological Warfare Division: PWD) に加わっていたリチャード・クロスマンらは、連合軍の占領後にも以前と同じ賃金水準と労働組合の結成を彼らに認めるという約束を含むプロパガンダ案を提起したものの、無条件降伏要求という方針に反するという理由でその案は葬られたという。

この事例にも示されるように、「良きドイツ人」と「悪きドイツ人」の分類に従って前者が何らかの希望の持てる条項を提示し、ドイツの内部崩壊をもたらすというプロパガンダ手法の有効性が高まった戦争末期になっても、無条件降伏要求という方針はそうした手法の利用を封じた。この点について PWE の責任者であったブルース・ロックハートは「『無条件降伏』政策は、枢軸国に対するわれわれのプロパガンダにおいてあらゆる希望条項の利用をきっぱりと終わらせた」と述べている

(Lockhart 1947: 229)。こうして、戦争末期における英国や米国の対独プロパガンダは、ブラック・プロパガンダを使った誤情報の伝達による混乱の惹起に加えて、ドイツ軍兵士にはおもに降伏勧告とその方法の伝達 (Gamett 2002: 441-443)、市民にはドイツの敗北の必然性や、民主主義の誠実さや人間性を強調することとどまることになったのである (Balfour 1979/2011: 412)。

7 結語

本報告では、記憶および「記憶」という観点から第二次世界大戦時の英国による対独プロパガンダについて検討してきた。そこで判明したのは、英国側が想定するドイツ人とプロパガンダとの関係に対する認識が、戦争初期と戦争後半とでは大きく変化しているということである。すなわち、戦争初期には「第一次世界大戦でドイツは英国のプロパガンダによって敗北した」という誤謬が支持されたのに対し、戦争後半になると「第一次世界大戦後にドイツ人はプロパガンダ神話を信じ、ドイツ軍は敗北していないとの記憶を持つようになった」という問題意識が前面に出てくるようになったのである。そうした認識の変化はプロパガンダの効果に対する考え方の変化を反映しており、戦略や戦術の補助的手段としてプロパガンダを捉える発想が一般的になっていった。このように記憶という文脈は、プロパガンダのあり方を考えるうえで重要な要素となりうるのである。

主要参考文献

- 木村靖二 (2014) 『第一次世界大戦』ちくま新書。
- 津田正太郎 (2018) 「『聴く』プロパガンダ: 第二次世界大戦時における英国のプロパガンダ政策 (上)」 (『社会志林』 65 巻 3号, pp.25-54)
- ハル、コーデル、宮地健次郎訳 (2001) 『ハル回顧録』中公文庫。
- ヒトラー、アドルフ、平野一郎ほか訳 (1973) 『わが闘争 (上) I 民族主義的世界観』角川書店。
- 藤田宏郎 (2007) 「フランクリン・D・ローズベルトの無条件降伏論」 (『甲南法学』 48 巻 1号, pp.1-36)。
- モレリ、アンヌ、永田千奈訳 (2002) 『戦争プロパガンダ 10 の法則』草思社。
- Balfour, M. (1979/2011) *Propaganda in War 1939-1945: Organisations, Policies and Publics in Britain and Germany*, London: Faber and Faber.
- Briggs, A. (1970) *The War of Words (The History of Broadcasting in the United Kingdom Vol. III)*, London: Oxford University Press.
- Crossman, R. (1949) 'Supplementary essay,' in D. Lerner, *Psychological Warfare against Nazi Germany: The Sykeswar Campaign, D-Day to V-E Day*, Cambridge: MIT Press.
- (1952) 'Psychological warfare,' in *Journal of the Royal United Service Institution*, vol. 98, pp. 319-332.
- Delmer, S. (1962) *Black Boomerang*, New York: The Viking Press.
- Fraser, L. (1944) *Germany Between Two Wars: A Study of Propaganda and War-Guilt*, London: Oxford University Press.
- (1957) *Propaganda*, London: Oxford University Press.
- Gamett, D. (2002) *The Secret History of PWE: The Political Warfare Executive 1939-1945*, London: St Emain's Press.
- Goldman, A. (1979) 'Germans and Nazis: the controversy over 'Vansittartism' in Britain during the Second World War,' in *Journal of Contemporary History*, vol. 14(1), pp. 155-191.
- Grisewood, H. (1968) *One Thing at a Time: An Autobiography*, London: Hutchinson.
- Kirkpatrick, I. (1959) *The Inner Circle: Memories of Iyone Kirkpatrick*, London: Macmillan.
- Lockhart, R. H. (1947) *Comes the Reckoning*, London: Putnam.
- 'Political Warfare,' in *Journal of the Royal United Service Institution*, vol. 95, pp. 193-206.
- Newcourt-Nowodworski, S. (2005) *Black Propaganda in the Second World War*, Gloucestershire: Sutton Publishing.
- Nicholas, S. (1996) *The Echo of War: Home Front Propaganda and the Wartime BBC, 1939-45*, Manchester: Manchester University Press.
- Ramsden, J. (2007) *Don't Mention the War: The British and the Germans since 1890*, London: Abacus.
- Saul, S. (2015) "Plain, unvarnished news?," in *Media History*, vol. 24(4), pp. 378-396.
- Stuart, C. (1920) *Secrets of Crewe House: The Story of a Famous Campaign*, London: Hodder and Stoughton.
- Taylor, P. M. (1999) *British Propaganda in the 20th century: Selling Democracy*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Todman, D. (2017) *Britain's War: Into Battle, 1937-1941*, London: Penguin.
- Vansittart, R. (1941) *Black Record: Germans Past and Present*, London: Hamish Hamilton.
- (1943) *Lessons of My Life*, London: Hutchinson.